

ガテマラ有機栽培コーヒー

新製品



チャフレンセ・バルバクキオル(Chajulense Valvaquyul)協会

チャフレンセ・バルバクキオル協会は、1990年に設立された非営利、かつ非政治的な団体であり、その目標とするところは、マヤ・イシルのコミュニティ精神を高め、評価すると共に、種族のあらゆる問題を改善していくことである。それらすべてのことは、自動と自立に基づく総合的な開発という視点に立てて推進される。そこでこのコミュニティ参加環境保護および住民文化と民族性の尊重が重視される。

協会はマヤ・イシルの会員を対象としているがキチエおよびカンパバの各種族に属する会員も含まれている。現在、協会は2,583人以上の会員を有しているうち500人以上は女性である。協会の影響範囲は広くキチエの4つの市町村と、ウエウエテナゴの3市町村を含んでおり、合計48のコミュニティを対象としている。新会員の訓練は明るい見通しを示している。

現在見られる協会の拡大が、そのことを証明している。1990年末には会員約250名であったが、1991年末には700人となり、1992年6月には1,573人に増加した。さらに、1993年12月には2,000人となり、1998年末には2,583人に達した。しかし、実際に協会から恩恵を受けている住民は約4万人に達している。

有機(オーガニック)コーヒー:これは最も重要な生産プロジェクトとなっている。協会内で最大規模の活動となっており、協会収入の大きな部分を占められていくからである。有機コーヒーが収穫され、特にオランダ、イタリア、デンマーク、スイスおよびドイツといった欧州市場のほか、米国市場にも輸出されている。

トランスフェア日本のホームページ

www.wakachiai.com/transfair



カンボジア産 胡椒



胡椒の山ととも

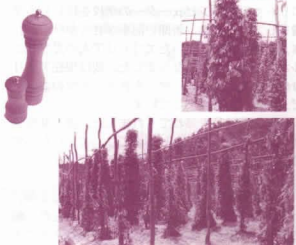
1994年にカンボジアの支援を始めましたが、何かカンボジアの特産品が皆様を買っていただけるものがないかと探していました。カンボジアから来たカポチャはどうか? と思い調べましたが生のカポチャは、害虫の規制で日本への輸入はできません。手工芸品は、まだ日本で売れるほど洗練されたものがありません。

一昨年、旅行ブックで、カンボジアの特産品カンボットの胡椒という記述を発見、さっそく2月に学校建設のワークキャンプに当たった機会に、サンプルをマーケットで購入しました。タイで売られている胡椒より、粒も大きく良質でした。

5月に来年のワークキャンプの下見にかけた折に、足をのぼしてカンボットにゆき、農家を訪問して実験的に20キロを持ち帰りました。購入した量が少なかつたために、直ぐに品切れになってしまいました。

現在、カンボットを活動地域にしている NGO の UCC (United Cambodian Community) と協力して胡椒生産者組合をつくることを相談しています。

2000年にはこの働きが伸展することを願っています。



タンザニア、キボンド難民キャンプ報告



横田 弘行

横田 弘行

タンザニアのキボンド難民キャンプへの道程は遠かった。タンザニアの首都、ダル・エス・サラーム国際空港を飛び立ち、ヴィクトリア湖畔の近く、ムウンザ空港にはTCRS (タンガニカ 크리스チャン難民奉仕) の職員が迎えてくれる手筈になっていたが、その気配はなかった。アフリカ時間があるのかも…なんて考えていた、まあ、あせらずゆっくり待つことにした。

空港玄関を出たとき、「タクシーに乗らないか」としつこく誘われ、危うく手荷物車をに放りこまれそうになった。アフリカの地は妻も私にとっても初めての旅である。少々不安な気持ちで待つこと30分、二人づれの青年がやってきた。「あなたは日本からやってきた横田牧師か?」と尋ねられ、その青年は自分をニボエと紹介した。記憶力が弱いのでニボエニボシ、ニボシーニボエと繰り返し、忘れなげと心に留めた。

ニボエはほりの立ち上りがデコボコ道を視線を遠くにやり、ランドクルーザーローパーを80キロ以上にもし上げるが巧みに運転していく。目的地である幹線道路脇には電気やローックなど明かりのない家々が続いていた。道中、綿花やチャコール(木炭)を積んだ大型トラックと何度もすれ違った。農民の貧しい生活の一面にふれることができた。夜の時を早ざと頃、やっと明かりが見えた。「あれがキボンド」とニボエに尋ねると国連と事。不安になり、「キャンプには電気があるの」と尋ねるとジェネレーターがあるとのこと。ほっと安心したところ、スタートから10時間経てキボンドに到達した。生涯またと味わえないであろう、ロピオに乗ったような旅であった。現地の職員たちは一日の仕事を終えて、くついでおられた。現地の総責任者ベハナン氏とわずかにあひプロジェクトの短期のボランティアとして私たちより先に滞在しておられたAKIさんが出迎えて下さった。難民キャンプの視察、ならびに古着分配の立合人として、遠い日本からやってきたと言うことで私達のために、既に特別メニューが企画されていた。

8/24日と25日は国連とユニセフそしてLWF(ルーテル世界連盟)の援助実施機関であるTCRSの約70名の職員による難民キャンプの一斉人口調査の日との事。その為か職員たちの神経はどりどりにしていた。

8/24、この日は奇しくも私の59才の誕生日であった。戦後、傘や靴がなく、ボロ服を身にまとい、恥ずかしい思いで学校をお訪めた者がなく、難民キャンプに立っている。4年前、松木牧師のサポートで始まった難民への古着支援の活動、清水教会の皆様協力と支援をいただき、広く静岡県民へと輪が広がり、衣類と共にいただいた貴重な質問を携えての現地視察の旅であった。

最初、ヌデッタ難民キャンプに案内された。1996年ルワンダから45万人もの難民がこのキボンドに流れきて、キボンド内の4つのキャンプの内、ヌデッタには43,000人、ムテンデリには40,000人、カネンポアには15,000人の難民がいて、実数は10万人に上るとの説明



3ヶ月のボランティアに参加した婦 麗紀さん

を受けた。

早朝よりそれぞれのキャンプ地から集まった難民は先ず、所属するキャンプ名、家族数を申告し、登録を済ませた印として手に黄色いリボンと、さらに4~5日消すことの出来ない蛍光塗料のサインを手押しされた。この登録をもつて、一日一人あたり350gのトウモロコシの粉、油と塩少々が、家族人数に応じて2週間分支給されること。

同じ日の午後、カネンポア・キャンプにおいて新生児1ヶ月未満の母親への古着支給に立ち合うことが出来た。幼子を背負った母親たちは原色の衣服を身にまとい、みんも明るい笑顔を見せていた。支給された古着はカナダからの物か? ベビー用品一式と固形餅2個と、おくるみであった。私達は、「神さまのご加護がありますように」と言葉をかけ、一人ひとりと握手し、104名の婦人たちに衣類をお渡りした。キャンプ地内1996年に設立された中等教育を施す学校があった。13才から25才までの生徒が在籍との事。内戦で逃けているうちに年を重ねる者がいて、本人の希望により就学することが出来ることとの事。

又、小学生の就学適齢児童が4,000人もいて1,000人が学べる学校を4校造るため大はしのレンガでもって校舎の外枠を造り、屋根はビニールの何とを張って造る計画との事。その為図書館の何とでも欲しい。図書のために援助して欲しいとの強い要請を受けた。

翌日はムテンデリ・キャンプで、高齢者・身体障害者の方々へ古着を支給する事になった。どこからともなく200名を越える人々が集まってきたが、その日準備されていたのは100名分に過ぎなかった。分配が終わると貰えなかった人々が、悲しそうにいつまでも居残って、手を差し何故かれないかと催促していた。

4世紀の神学者アウグスティヌスは「富める者にとつての余剰品は、貧しき者にとつての生活必需品」と語つたそうだが、21世紀に何故か同じ宇宙船地球号に乗り合わせるながら、向こうにも格差があるのか…心が痛んだ。

人間としての尊厳、誇りをなかり捨て去つてまで、古着を払い掴みに求める人々の姿に心がしめつけられた。日本と難民キャンプの経済格差、物資格差の何と大きなことか!

古着はいくらあってもあり余ることはない。必要とされている必需品です。温かい手を差し伸べようではないか。(日本編ルワンダ清水教会牧師)